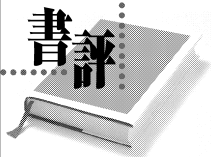


書評



松田晋哉 著

基礎から読み解く DPC

正しい理解と実践のために(第2版)

邊見公雄

医療への信頼を維持する制度の質も併せて考える

この度『基礎から読み解く DPC—正しい理解と実践のために(第2版)』が出版された。時宜を得たものと思われる。初版から2年が経過し対象病院も増え、この制度は広がり定着しつつある。見直しや今後の方向を考える際の参考書として、また、新たに導入を検討されているところには座右の書としてぜひ購入をお勧めしたい。

かく言う私も実は初版からの読者であり、DPC導入準備のために職員へ回覧したりと、大変重宝した記憶がある。当時、DPC制度そのものがあまり理解されていない時期でもあり、「患者にとって何の利益もない。院長の経営戦略で導入するのはおかしい」という院内の守旧派的医師に対する反論、説得の理論的な支柱となったのである。著者の“医療の標準化、透明化こそが日本の医療、特に入院医療の質の向上に結びつき、そのためのツールとしてDPCを開発した”というこの数行の文章が私の躊躇している背中を後押ししてくれ、職員の理解も得られ準備・導入へと前進したのである。いわば私の恩人のような書である。特に、各医療職が縦割的になっている傾向が強い公立・公的病院にあって、本書ではそれぞれの医療職がDPCにどのようにかわるかによって全職員に医療の質、経営の質へのプラスアルファの貢献を求められるということが明記されている(第5章)。本院がDPC導入に先立ち薬剤部を始め、臨床検査部や放射線部の24時間体制を整えることができたのも、自治体病院の環境変化もあるが職員の経営の質への貢献という側面もあり、本書の効能が大きく関与しているものと確信している。

その後、小生が中央社会保険医療協議会委員になり、DPC分科会のオブザーバーとして参画し、松田先生とのかかわりも強くなってきた。どんな会議でも先生は数字を中心とするデータを根拠に

説明し、反対の意見の方にも静かに反論される。そこには日本のDPC開発の第一人者という気負いは全くない。それが余計に信頼感を生み、端正な容貌でとつとつと理路整然と話されるので、余計に反論しにくくなるのであろう。

閑話休題(それはさておき)、第2版ではDPC導入360病院の主たる悪性腫瘍患者の治療実績が参考資料1に、難易度別手術件数が参考資料2に、また参考資料5には2005年度のDPC別原価が付けられている。他院と比較して自院の位置を知り、ベストに学ぶというベンチマーキングの第一歩として活用できる資料である。2006年度診療報酬改定で紹介率の重視が見直され、病院を評価する新しい臨床指標(クリニカルインディケーター)の導入が切望されている。それにもこの資料は役立つものと思われる。また、今後の方向としての特定健診や特定保健事業の項目もあり、医療圏別傷病構造にもDPCの有用性が述べられている。これは今後の医療制度改革の基礎資料となる可能性が大きい。第7章では、先生の勤務地である福岡県の2次医療圏(診療圏)ごとのデータが例示され、大変興味深い。他の医療圏でもこのようなグラフはいつでも作成できるものであり、医療計画が可視化できる日もそう遠くないであろう。第8章のまとめの中で先生は「医療の質、特に経営維持のための経営の質、医療への信頼を維持する制度の質も併せて考えられなければならない」と述べておられるが、これこそが松田先生がDPCにかける情熱の基となるお考えであると推察する。

とにかく、本書をきちんと読めばDPC教とまではいかずとも、DPC親派にはなれる1冊である。ただし、DPCに距離を置きたい人は近寄らないことをお勧めする。

(赤穂市民病院長)

● B5 196頁 2007 定価3,150円(本体3,000円+税) 医学書院